

# 中国の文献に出現する「倭」、「倭人」について

メモ)鉄本 2024.07.15

来館者から「倭」の意味についての質問があり調べてみました。

## 1. 「倭」の意味

### (1) 字義 『新漢語林』より

①従うさま。柔軟なさま。つつむさま。 ②うねって遠いさま。 \*解字: 「委」は、なよやかな女性の意味。

### (2) 過去における「倭」の語源各説

①漢人に「我」、「吾国(わがくに)」と自称したことが国名と理解され「倭」に転訛したとする説:

卜部懐賢(兼方)(鎌倉時代の神道家)、一条兼良(室町時代の古典学者)、松下見林(江戸時代の国学者)、の説

②「倭」の中国音は「ゐ」であり、『魏志』後漢書』にみえる「伊都(国)」が「倭」に転訛したとする説:

「伊都(怡土)」=I-tu → 「委(倭)土」=Wi-tu → 「委(倭)」=Wi (発音は Wei)

白鳥庫吉(東京帝国大学教授 東洋史 邪馬台国九州説)の説 \*「怡土」は旧郡名(現在の糸島市)

## 2. 文献に出現する「倭」、「倭人」の位置付け

古代中国の文献を見ると、「倭人」は中国南部から中部、東部、そして日本列島と広い範囲に出現する。

| 文献名                | 撰者             | 編纂時期                 | 原文(上段) / 注釈(下段)  |
|--------------------|----------------|----------------------|--|
| 『論衡』<br>A          | 王充<br>(27~100) | 後漢<br>25~220年        | 「成王時 越裳獻雉 倭人貢鬯」<br>読み:成王の時、越裳は雉を献上し、倭人は鬯草を貢いだ。<br>*「成王」とは、周王朝第2代王。紀元前1000年頃。<br>*「越裳(えつしょう)」とは、中国南部に居住していた民族。<br>*「鬯(ちやう)」は、①香草のウコンソウのこと。②匂い酒(黒きびとウコンを混ぜた酒)を示す。この草は中国・鬱林(うつりん)郡(現在の広西チワン族自治区中部)の名産で縁起の良い草とされた。<br>⇨この「倭人」は、中国南部に定住していた「越族」の一氏族と推定。               |
| 金石文<br>(磚)<br>B    | 元宝坑村<br>1号墓出土  | 170年頃                | 「有倭人以時盟否」<br>読み:倭人、時を以て盟すること有や否や。<br>*「盟」とは、近接する国々の間で神明にかけて交す同盟<br>*金石文の出土場所は、中国・安徽省北西部の亳郡。<br>⇨この「倭人」は安徽省亳郡に定住していた「倭族」と考えられる。   |
| 『山海経』<br>海内北経<br>C | 著者複数           | 秦・漢代<br>前4世紀<br>~3世紀 | 「蓋国在鉅燕南、倭北、倭屬燕」 「倭」に関する最古の記事<br>読み:蓋国は鉅燕(鉅=大の意)の南、倭の北に在り、倭は燕に属す。<br>*時代は、周初期(前1000年頃)又は燕が戦国時代(前3世紀)の2説がある。また、燕の位置にも諸説ある。<br>*朝鮮半島では、北部に燕、中央部に蓋国、南部に倭があった。<br>*蓋国は、前2世紀頃から存在した古代民族の穢とする説が有力。<br>*「倭属燕」は、倭が燕に隷属という意味ではなく、戦国時代の「分野説」(中国全土を天の28宿に割り当て区分)に基づく分属を意味する。 |
| 『漢書』<br>王莽伝<br>D   | 班固<br>(32~92)  | 後漢<br>25~220年        | 「東夷王度大海奉國珍」<br>読み:東夷の王は大海を度(わた)りて、国珍を奉じ。<br>*撰者の班固は王充と同時代の人物で、互いに知己であった。<br>*中国東方の部族をすべて「東夷」と称していた。日本、朝鮮など極東民族も東夷に含まれるが、大海を渡るとあるので倭のことと考えられる。<br>*「國珍」の内容は不明。  |

|                     |    |    |  |
|---------------------|----|----|--|
| 『漢書』<br>地理志<br>燕地の条 | 同上 | 同上 | 樂浪海中有倭人為百餘國。歲時來獻見云<br>読み: 樂浪海中有倭人有り。百余国を為す。歳時を以て来り、献見すと云ふ。     |
|                     |    |    | * 樂浪は前108年前漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして、今の平壤付近に設置した郡。『魏志倭人伝』では、「帶方」を基準にしている。 |

(注) A~Dは、次の地図上の記号に対応。



- ・右の地図は前100年頃
- ・燕-蓋-倭の位置は『山海経』による目安。

【参考】 天の二十八宿



### 3. 「倭」、「倭國」、「倭王」、「倭国王」の用法の違い

『魏志倭人伝』、『宋書倭国伝』、『後漢書倭伝』に出現する「倭」関連語の用法をみる。

#### (1) 単語出現数

|       | 倭・倭地<br>(地域名) | 大倭 | 倭人 | 倭種 | 倭国 | 大倭王 | 倭王<br>倭女王 | 倭国王 | 倭+官名<br>(難升米など)、<br>物品名(錦) |
|-------|---------------|----|----|----|----|-----|-----------|-----|----------------------------|
| 魏志倭人伝 | 4             | 1  | 1  | 1  | 3  | 0   | 8         | 0   | 4                          |
| 後漢書倭伝 | 1             | 1  | 1  | 1  | 2  | 1   | 0         | 1   | 0                          |
| 宋書倭国伝 | 4             | 0  | 0  | 0  | 1  | 0   | 2         | 6   | 0                          |

#### (2) 「倭」に関連する使用語の用法と解釈

「倭王」、「倭国王」の用法に注目すると、『魏志倭人伝』では「倭王」、「倭女王」が使用されているが、「倭国王」は使用されていない。『宋書倭国伝』では、「倭王」と「倭国王」が混在している。

関東学院大学教授河内春人氏によると、「王」号、「国王」号の用法には次のような使い分けがあるという。

- ①「王」号： 中国と地理的に近く密接な関係にある周辺国、特に、5世紀には南北朝の対立に際して軍事的協力が期待された関係国に授与された。

例： 卑弥呼＝「親魏**倭王**」「**倭女王**卑弥呼」（『魏志倭人伝』）

興＝「**倭王**世子興」 武＝「安東大將軍・**倭王**」（『宋書倭国伝』）

- ②「国王」号： 遠隔地の通交が限られた国に授けられた。

「倭の五王」については、外藩の国として宋から承認され、君臣関係としては外臣の位置付け。

例： 帥升＝「**倭国王**帥升等」（『後漢書倭伝』）

済＝「**倭国王**済」「安東將軍・**倭国王**」（『宋書倭国伝』）

『宋書』では、讚は倭讚のみで称号なし。珍、済、興は倭国王、武は倭王の称号と表記されている。

各史書の表題における「倭」に関する**呼称**は次のようになっている。

- ・『魏志』では「東夷伝」の中で「**倭人**」が記述されている。「東夷」の中で、他地域では国名が記載されているのに対して、「倭人」と民族名での呼称となっている点が注目される。
- ・『漢書』地理志燕地の条で、朝鮮半島に触れた記述の中で、伝聞として「**倭人**」が記述されている。
- ・『後漢書』列伝巻85の東夷列伝では、朝鮮半島の国々と共に「**倭**」が記載されている。
- ・『宋書』列伝第57夷蛮伝東夷では、東南アジア・朝鮮半島の国々と共に「**倭国**」が記載されている。

☞ 「倭」の呼称が、民族名から国名に変化してきているが、これは倭人による小規模の集合体(国邑)が列島に緩やかな関係性を持って散在している状態から、特定勢力を中核に複数の首長制社会(クニ)が連携した初期国家が形成されつつあることを物語っている。

- ③「倭人」： 「倭」は、中国音では、Wei(中国南方)又はWo(中国北方)である。(上古音では Uar/Iuar)

「倭人」は、第2項に記述したように、中国南部、中部、朝鮮半島、日本列島にあらわれる。これらの「倭人」が、同一民族なのかは疑問が残る。

『論衡』にみられる「越裳(えつしょう)」は、春秋戦国時代(紀元前6世紀頃)に中国南部に勢力を伸ばした民族で、諸侯国の一つである「越」を建国した。この民族は、華南から

ベトナム北部まで広く分布しており、種族が多いため百越とも総称された。

この民族は漢民族とは異なるが、三国時代頃には大半の集団が漢文化に吸収された。

この「倭人」は、百越の中の一氏族と見られている。中国上古音では、「越」と「倭」は共に Wo であり、「越」の発音が日本に伝わったという説(鳥越憲三郎)がある。

文化面では、稲作、断髪、黥面(入墨)、龍蛇信仰、太陽神崇拜、鳥崇拜文化、裸潜水漁法など、百越と倭人の類似点が見られる。

- ④「大倭」: 「大倭」を、(i) 大和朝廷とする説(吉田・山田説)、(ii) 倭人の中の大人(官位の高い人物)とする説(那珂・橋本説)がある。「大倭」を訓読みすれば「おおやまと」であるが、中国の発音は、DaWei である。仮に大和朝廷とすると、『倭伝』の文「使大倭監之」が「大和朝廷を使って、これを監督する」という意味になり、権力主体不明の文面となる。ii の説が妥当とされる。
- また、『魏志高句麗伝』には、高句麗に臣属していた氏族の「加」の有力者に「大加」と表記する用例もあり、同じ用法として「大倭」を高い身分の人物として解釈することに妥当性がある。
- ⑤「倭人」: 「倭人」は、一定の政治体で明確化された「国の民」ではなく、漠然とした民族集団を示す。『三國史記』新羅本紀には、「倭人行兵欲犯邊」、「倭人遣兵船百餘艘掠海邊民戸」という倭人による略奪の記述がある一方で、「與倭國結好交聘」という記述がある。国と国との関係を表す場合には「倭國」が使われている。
- ⑥「倭國」: 「倭國」は、倭という民族が比較的広い地域と人民を統合している政治集団のまとまりを示す。「國」は、『魏志倭人伝』の「奴國」、「末蘆國」などの小規模集団、及び、「倭國」のような比較的広範囲集団の双方に共通して使用され、政治的まとまり集団を示す語として用いられている。

### (3) 倭は卑字か?

「倭」の音は、猥(わい)に通じ、卑猥、汚穢の人を指すとする説があるが、これは間違いである。

後漢の『説文解字』(許慎の著)には、倭の字義は「順兒(じゅんぼう: 素直な振る舞いの意)、人に従い委の声」とあり、委についても「委従(従順の意)」としている。

『新漢語林』の字義を基に、さらに各史書の記述を総合して「倭」の実相を想定すれば次のようになる。

➡ 倭は、「遠く海原を渡ったところに住む民族で、その性質は穏やかで従順な人々である。」

### 【参考文献】

- ・歴史文化ライブラリ『魏志倭人伝を読む 上・下』佐伯有清 吉川弘文館 2000
- ・『古代国家と東アジア』上田正昭 角川学芸出版 2010
- ・新潮選書『私の日本古代史 上』上田正昭 新潮社 2012
- ・新訂『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編 岩波書店 1951
- ・論文「倭」「倭人」について 紀要第7号抜刷 立命館大學白川静記念東洋文字文化研究所 張莉 2013
- ・『海でつながる倭と中国 ～邪馬台国の周辺世界～』檀原考古学研究所編 新泉社 2013
- ・『倭の五王』河内春人 中公新書 2018
- ・『魏志倭人伝を読む 上・下』佐伯有清 吉川弘文館 2000
- ・『前方後円墳と社会』序章 都出比呂志 塙書房 2005
- ・『考古学論考 古代日本の漢字文化と仏教』川崎晃 慶応義塾大学出版会 2012

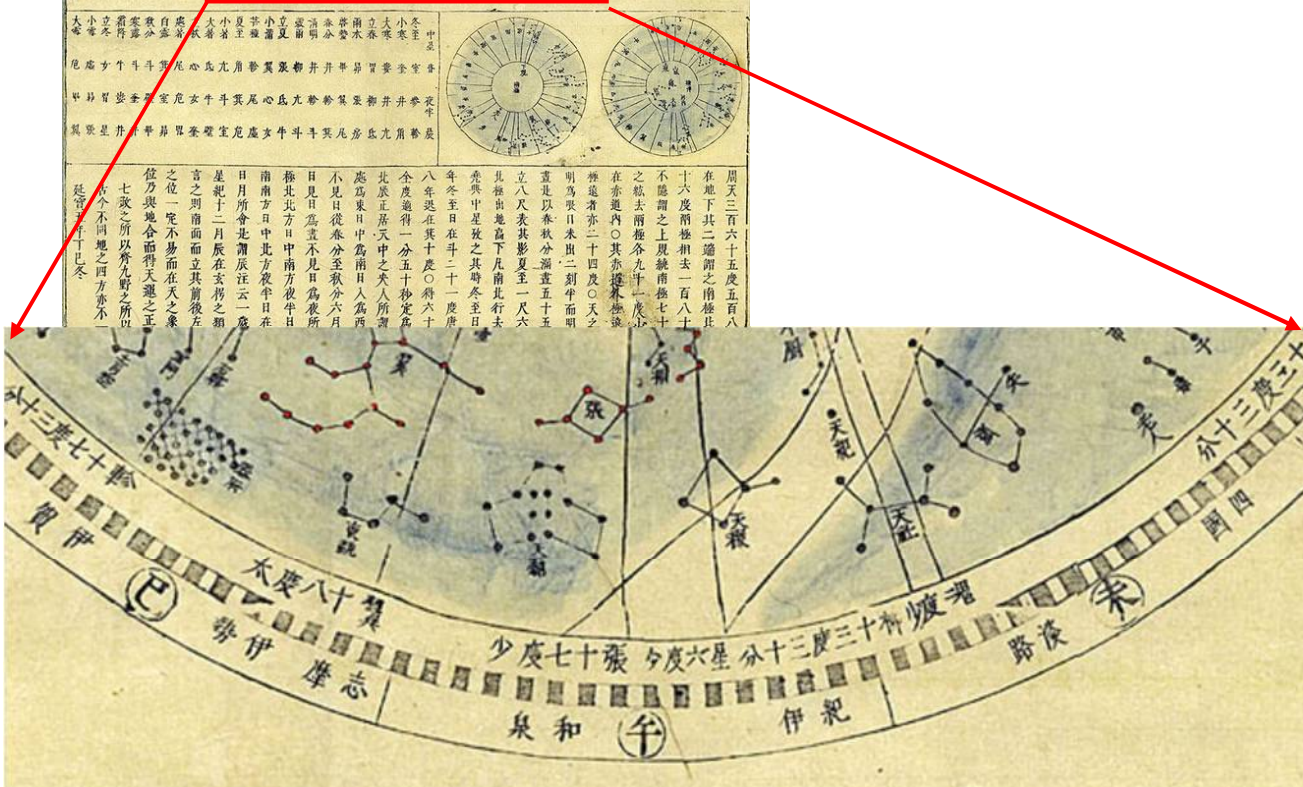
付記:「分野説」に関する参考資料

\* 第2項の山海経の解説文「分野説」の補足

【「分野説」に基づく天地図の例】

A. 天文分野図(日本 出典: 国立天文台)

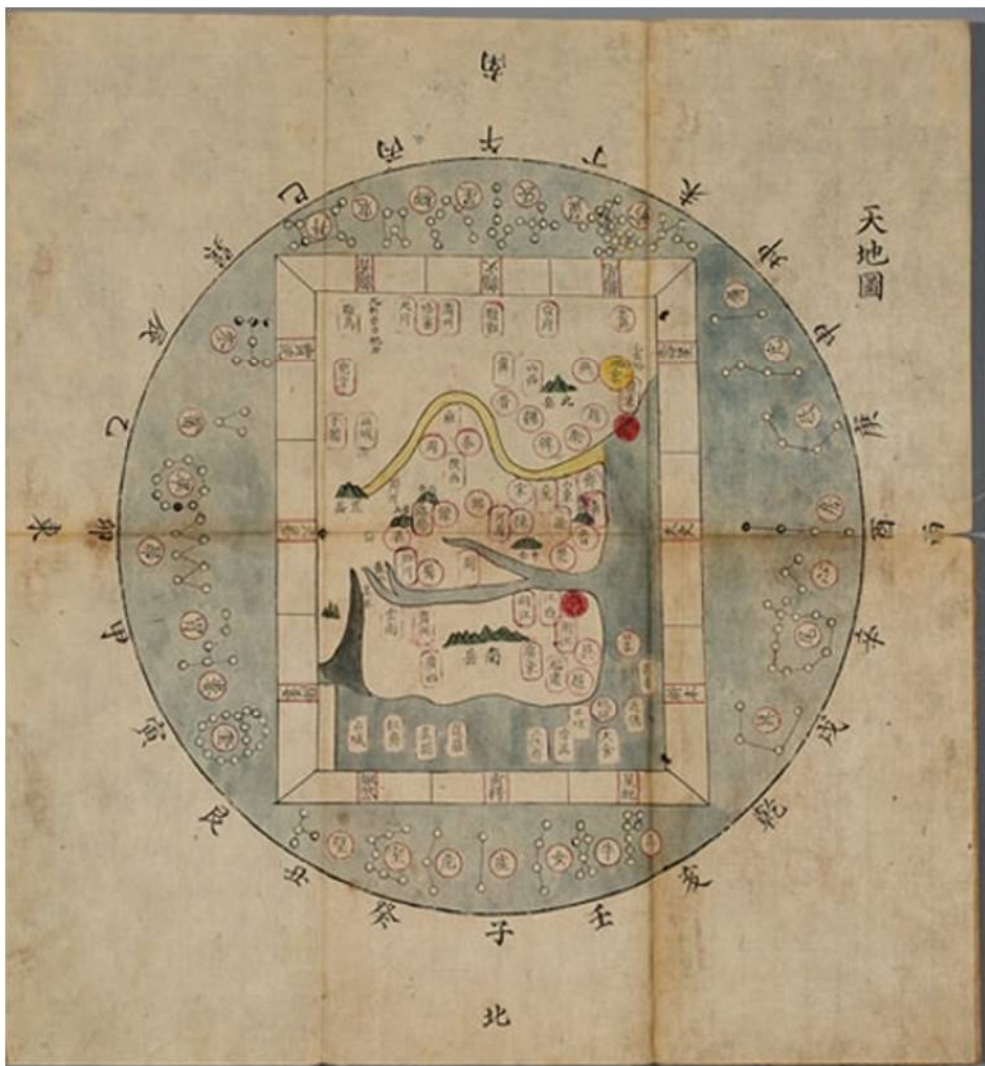
渋川春海(江戸期の暦学者 1639~1715)が日本の国土を当てはめて作った天文分野図。星図を囲む縁(ふち)を見ると、「伊勢」、「紀伊」、「和泉」、「九州」などの文字が見える。



B. 天地図 (出典: ソウル 国立中央博物館)

四角形の土地は中国を中心とする地上世界で、その周辺には天を象徴する円で28宿の星座を配置する。中国の歴代王朝、歴史的事実と関連した地名が入っている。中国の盛京(せいけい)と満州一帯の地図も載せられている。地図の余白には八道にあった朝鮮歴代王朝の沿革が書かれている。日本と琉球国の地図も載せられているが、内容は非常に簡略で輪郭の歪曲が著しい。

(注) 盛京: 清朝の北京遷都前の首都。現在の瀋陽である。以前は奉天と呼ばれた。



[陳壽 魏志倭人傳 \(aozora.gr.jp\)](http://aozora.gr.jp)

[沈約 宋書倭國傳 \(aozora.gr.jp\)](http://aozora.gr.jp)

[後漢書倭伝 - Wikisource](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%8C%E6%B8%8B%E4%B9%A9%E4%B9%A9%E4%B9%A9)

[天地図 | 主要収蔵品検索::国立中央博物館 \(museum.go.kr\)](http://museum.go.kr) 28宿図

[天文分野之図 | ギャラリー \(nao.ac.jp\)](http://nao.ac.jp)